

樹木葬墓地の特性と墓制での位置づけ ～「京都の樹木葬」意識調査から～

檜村久子

はじめに

「樹木葬」という名で呼ばれる墓地は全国的に近年増加している。「樹木葬墓地の多様化とその意味と背景、そして共同墓の進展」で述べたように、その形態も経営・管理者、立地も多様化の一途である。その中で、「京都の樹木葬」と呼ばれている墓地は京都市内に現在4カ所あり、開設から6年が経ち、その利用者は約500人である。

大徳寺塔頭・正受院の樹木葬「苳林檀」、東福寺塔頭・即宗院「自然苑」、同莊嚴院「樹木葬」、建仁寺塔頭・両足院「緑雲苑」の4カ所は、いずれも京都という大都市の有名寺院の塔頭である。この「京都の樹木葬」と呼んでいる墓地は特異な形態をしている。4カ所の利用者は、樹木葬墓地に対して求めるものが、多くの全国の樹木葬墓地への埋葬希望者と比べて何が特徴的なのか。多様な墓の選択肢の中で、なぜ樹木葬を選ぶのか、本稿は「京都の樹木葬」の利用者の特徴とそこから見える実態と意識を探ることにより、樹木葬の意味や葬送墓制の意識と空間的位置づけを探ろうとする一つの試みである。

I. 4カ所の寺院の樹木葬墓地の特徴

樹木葬墓地は寺院でも自治体の公営墓地でも設置されているが、この4カ寺院の「樹木葬」の最大の特徴は、都心の寺院境内地の墓地の一角に「樹木葬」墓地の区域が造られていることである。各墓地の状態は開設順に次のようである。

- ・東福寺莊嚴院「樹木葬」（京都市東山区本町）は2011年7月に開設。石積み



写真1 東福寺莊嚴院「樹木葬」(2017年1月撮影)



写真2 東福寺即宗院の自然苑



写真3 即宗院秋の合同法要祭



写真4 即宗院合同法要後、本堂での住職の話と交流会

された台地に杉苔が植えられ、石積み足元のプレートにより位置を確認できる。1区画20cm 四方である。(写真1)

- ・東福寺・即宗院「自然苑」(京都市東山区本町)は2011年9月開設。斜面地にコクマザサが植えられ、1区画25cm 四方である。(写真2)(写真3)(写真4)
- ・建仁寺両足院「緑雲苑」(京都市東山区大和大路)は2013年5月開設。角ばった石積みの上に杉苔が植えられ、やはり石に沿って置かれた数字の交点により位置を特定できる。1区画20cm 四方である。(写真5)(写真6)
- ・大徳寺正受院(京都市北区紫野)は2015年5月開設。石積みされた台地上に杉苔が植えられ、景石が所々に配置され、縦と横の線上の交点によって埋葬



写真5 建仁寺両足院の樹木葬



写真6 合同供養祭後、本堂での住職の話と会員交流



写真7 大徳寺正受院の樹木葬



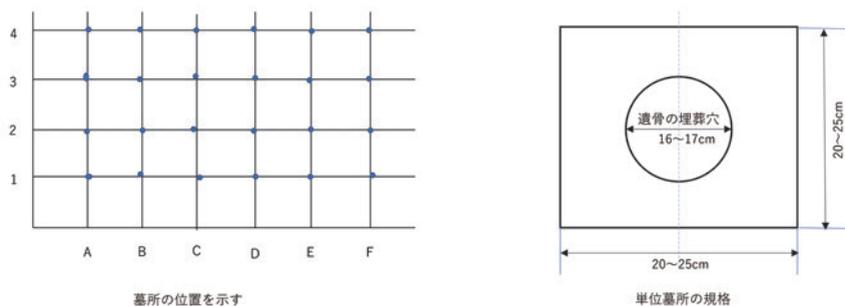
写真8 正受院合同法要祭

位置が分かる。1区画20cm四方である(写真7)(写真8)(写真9)。

いずれも埋葬方法は、図1のように石積みの縦と横の線上の交点によって、個別の埋葬位置を特定している。その交点の位置に、図2のように、20～25cm四方の中に、半径16～17cmの円筒状の穴を掘り、珪砂を敷き、その上にさらし木綿に包んだ遺骨を入れ、その上に珪砂と真砂土を入れる方式。



写真9 正受院合同法要後の本堂での交流会



墓所の位置を示す

単位墓所の規格

図1 遺骨埋葬の平面モデル図

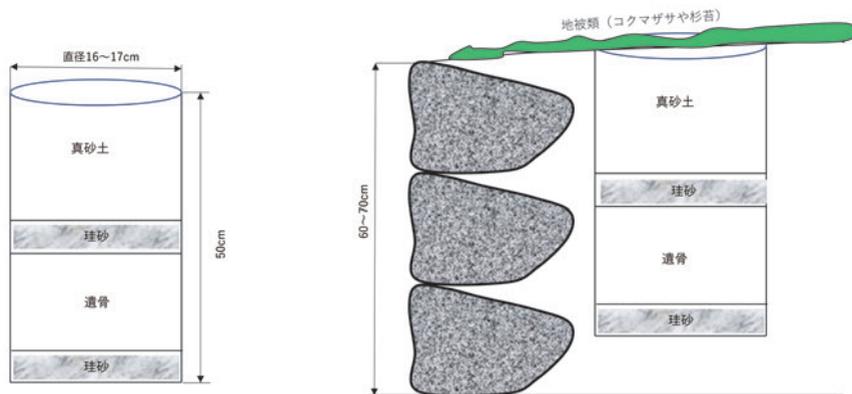


図2 遺骨埋葬の断面モデル図

2人利用の場合は上下で埋葬する。個別の埋葬だが、大変省スペースである。

また、いずれも33回忌以降は、同寺院にある総墓に土となった遺骨の一部を合祀し、引き続き供養する、とされている。希望者は石の墓碑に名前と埋葬区画を刻むことができる。

4カ所とも樹木葬墓地の経営管理者主体は各寺院塔頭である。各墓地には利用者が入会する会員組織があり、春と秋の年2回合同供養祭（法要と記されている寺院もある）を行い、33年間合同供養を続ける。合同供養祭の日時を決め、会員に往復はがきで知らせ、会報を届けている。利用者は檀家にならず、年会

費は5000円で、会員は亡くなった段階で自然退会となるシステムである。

合同供養祭は、住職と樹木葬墓地の前に集まり、住職の読経と会員が順次参拝する。その後寺院の堂に集まり、住職の講話を聴き、また会員同士の交流が行われる。

会運営の事務局によると、2011年8月～2016年10月時点の4カ所の樹木葬利用者の傾向は次のとおりである。

東福寺荘厳院の2011年7月に始まり、東福寺即宗院は2011年、建仁寺両足院は2013年、大徳寺正受院は2015年と5年間に続けて開設されている。その利用者は地域別にみると、京都市内は24%で、京都近郊（近畿）が41%、関東は22%、それ以外の遠隔地が14%ある。その中にパリやニューヨーク在住もある。

契約時の状況として、「遺骨」を持っている人は15%、「遺骨と生前契約」の両方の人は32%、「生前契約」の人は54%で、生前と両方の人が85%を占めている。区画利用形態では、「1人用」が24%、「2人用」が76%で、4カ所とも2人用の割合が高い。

Ⅱ 調査の方法・内容・結果について

1. 調査の方法

調査方法は、4カ所の寺院の樹木葬利用者に対して、下記のように各寺院の会員組織を通してアンケート調査による意識調査と、合同供養祭時に参加者に追加アンケート調査とヒアリングを実施した。

- ① 4カ所の寺院の樹木葬墓地の利用者に郵送でアンケート調査による意識調査。
送付総数は473人、回収期間は2017年9月2日～10月20日。
- ② 秋の合同供養祭参加者への追加アンケート調査。2017年10月21日～23日。
- ③ 秋の合同供養祭時に、参加者の個別ヒアリング調査を実施した。調査期間は同上。

2. 調査の内容

(1)全体意識調査

①墓所に関する意識

問1 どの媒体で知ったか 問2 契約墓所以外の他の墓所の検討・検討した墓・葬送のタイプ 問3 誰のための契約か 問4 樹木葬墓地購入の前に墓があったか・墓があった場合その墓に入らない理由 問5 なぜ樹木葬を選んだのか 問6 全国に多くの樹木葬墓地があるがなぜここを選んだのか 問7 散骨ではなく樹木葬を選んだ理由 問8 埋骨の後樹木葬墓地に祭祀をする人がいるか・誰を想定しているか 問9 埋骨は全骨か分骨か・分骨の残りはどうするか 問10 樹木葬墓地への埋葬のイメージ 問11 墓地を訪れたときの気持ち

②墓参・合同供養祭に関する意識

問12 合同供養祭の現在の参加状況・参加の理由・参加しない理由 問13 合同供養祭への希望（自由記述） 問14 墓参の頻度・その機会 問15 埋葬者がまだいない生前契約者へ墓地に来る機会・なぜ墓地に来るのか 問16 契約後の満足度（墓地使用料・年会費・合同供養祭・全体として）

③信仰や宗教的な行動に関わる意識

問17 家の宗教は別として信仰している宗教があるか 問18 現在家庭や家の中で死者を供養、追慕する場があるか 問19 個人を追慕する、供養することはどのような行為を指すか 問20 現在の家族で次のことがどの程度行われているか（仏壇、お盆の行事、墓参り、個人の年忌法要） 問21 次の行為についてどのように感じるか（墓の継承、仏壇に先祖を祀る、追慕、お盆や墓参り、年忌法要） 問22 あなたの先祖観・先祖とは誰を指すか

④葬儀に関する意識

問23 すでに樹木葬に埋葬した人は故人の葬儀をどのような形式で行っ

たか・生前契約の人は自分の葬儀をどのような形式ですか 問24 故人の葬儀をどれくらいの規模で行ったか 問25 戒名についての考え

(2)追加アンケートの項目は、京都に訪れる頻度、寺檀関係にある地元の寺の有無、お墓を決めるにあたって重要度の度合い。

(3)個別のヒアリング項目は、①あなたは、なぜこの京都の樹木葬墓地を選んだのか ②京都あるいはこの寺院は、あなたにとってどのような場所か。

(例：近所で親しみのある場所、観光地として好きな場所、何かしら縁のある場所) ③死者を供養するとき、あるいは自分が供養されるときに、何を重要視するか

3. 調査結果の概要

- ①郵送による会員全体のアンケート調査の回答総数は389人、回収率82.24%。回答者の性別は男性183人、女性203人（有効回答386人、無回答3人）。回答者の平均年齢69.0歳（有効回答382人、無回答7人）
- ②追加アンケート調査の回答者総数は106人。回答者の平均年齢は68.22歳（有効回答95人、無回答11人）

〈会員全体アンケート調査の回答者の属性〉

- ・性別は、男性183人（47.04%）、女性203人（52.19%）。
- ・年齢別は、70～79歳が39.01%、60～69歳34.82%と、60～79歳が7割以上で、定年後に自分の墓を考える年齢層が多い。50～59歳も9.16%、80～89歳も11.52%ある。
- ・既婚・未婚別では、既婚者62.47%、死別23.91%、離別5.91%、未婚5.14%。未婚は5%でほとんどの人は結婚し、家族を持っていたことが分かる。
- ・子どもの有無は、男子のみ17.99%、女子のみ28.53%、男女両方30.08%で、8割弱に子どもがあり継承者になりえる人がいる。
- ・居住地の地域別は、京都以外の近畿が35.92%、京都30.83%と京都市近隣周

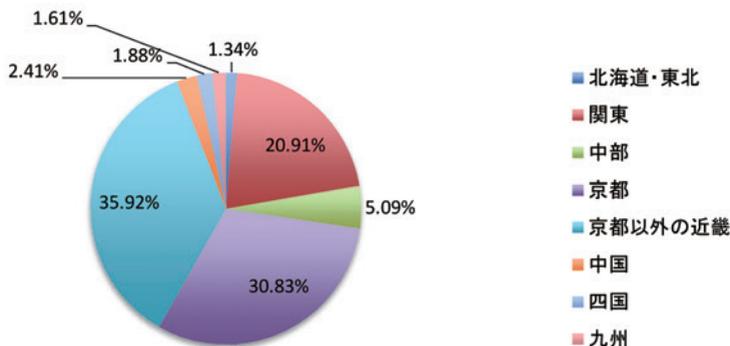


図3 回答者の居住地

辺が6割強である。しかし近畿以外では関東も20.09%と割合は多い。中部5.09%、その他中国2.41%、四国1.88%、九州1.61%、東北・北海道1.34%もある。(図3)

- ・ 子供時代に過ごした地域は、京都以外の近畿25.80%、京都23.14%、関東13.83%、中部10.64%、九州10.11%。京都や近畿圏が半数で、地域に関わりがある人が多いが、それ以外も半数あり、どのような人たちであろうか。

Ⅲ 結果の考察

どのような人がこの樹木葬を選択しているか、その特徴

全体アンケート調査の各項目の結果から、調査対象としたこの樹木葬を選択している人の特徴を列記するとおよそ次のように考えられる。

- ・ 情報通、所得階層、社会的階層のある範囲
- ・ 埋葬した場所が特定でき、“参拝ができる”
- ・ 永代供養を望んでいるのに、子どもに祭祀を期待している
- ・ 個別墓ではないのに、子どもに祭祀を期待している
- ・ 墓の継承と参拝への期待は異なる

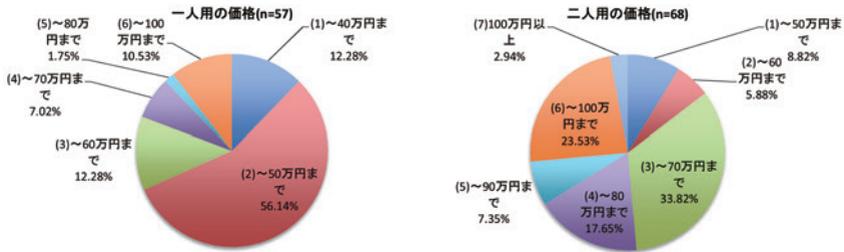


図4 一人用の区画の希望価格帯、二人用の区画の希望価格帯

- ・ 樹木葬のイメージは可視化できること
- ・ 特別「信仰する宗教」はないが、宗教的行為は行っている
- ・ 先祖を敬っているのは8割

①情報通、経済的階層、社会的階層

樹木葬墓地を知った方法（問1）は、圧倒的に多いのは「インターネット」234人（60.62%）で、次は「新聞・情報誌」93人（24.09%）。友人・知人からの紹介9.33%、テレビ報道・ラジオ番組7.51%もある。意識的に樹木葬墓地の情報を集めているとみられる。

契約後の満足度（問16）の中で、墓地使用料については、5段階で5は53.11%、4は24.53%で、満足している人は77.64%と多くの人が満足している。墓地使用料は、1人用で50万円～60万円、2人用で70万円～80万円であるので、追加調査の「今後の参考に、どの程度の価格帯なら樹木葬墓地の購入が可能か」では、1人用では「40～50万円まで」が56.14%と過半数を占め、2人用では「60～70万円まで」が33.82%、次いで「90～100万円まで」が23.53%であった。（図4）（有効回答数は1人用で57人、2人用で68人）現行の使用料はやや高めだがほぼ利用者の希望に近い。

公営墓地の樹木葬墓地の使用料はおよそ10～20万円前後なので、今回の利用者は経済的にやや余裕があると考えられる。例えば、東京都小平霊園の樹木墓

地は遺骨一体18万8000円（当初から合葬型は12万8000円）、横浜市メモリアルグリーン樹木墓地は永年使用で一体14万円と管理料は永年使用で6万円の計20万円。浦安市樹林墓地は当初から合葬型で永代使用で一体12万円、京都市深草墓園樹木型納骨施設（平成30年9月申込予定）は一体18万円（当初から合葬型）である。民間では大阪府高槻市の山地にある神峯山寺にある桜葬墓地では40万円である。

「樹木葬墓地が誰のための契約か」（問3）では、「自分」が圧倒的に多く309人（79.64%）で、次いで「配偶者」256人（65.98%）。配偶者は夫か妻か、どちらかが先に亡くなっている場合、あるいは存命中の夫婦か。いずれにしても自分、あるいは配偶者と自分たちの墓を生前に契約した人たちである。

葬送・墓制について情報通で、経済的にもある程度余裕があり、生前に自分の死後の準備をしておくというある社会的階層が考えられる。

これは、「個人化・無縁化する社会の公共墓地の変化と対応」で述べたように、イェ亡き時代の個人化する死の葬送・墓制の3つの方向の中で、「自ら準備する葬送の人たち」と合致している。

個別ヒアリングでは、「定年で京都に引っ越してきた。娘二人で、自分は次男でお墓を考えていて、インターネットで探した。自宅からいつも散歩に来ていたこともあった。子どもはいずれ離れる時が来ても、自由にお参りに来られる。伝統あるお寺で、歴史もあり、この先を考えると決めて安心した」と言う。

②樹木葬墓地は埋葬した地点が特定でき参拝ができる

樹木葬墓地は「埋葬した場所が特定でき、“参拝”ができる」特徴がある。墓地の無形化や自然に還る葬法でも散骨ではなく樹木葬墓地が選ばれるのは、これが大きい理由だ。また樹木葬墓地でも公共墓地によく見られる共同埋葬の合葬式の様式と少し異なり、遺骨の個別埋葬か所があり、埋葬した地点もおおよそ特定できる。

「散骨」ではなく「樹木葬」を選んだ理由（問7）として、「埋葬した場所が

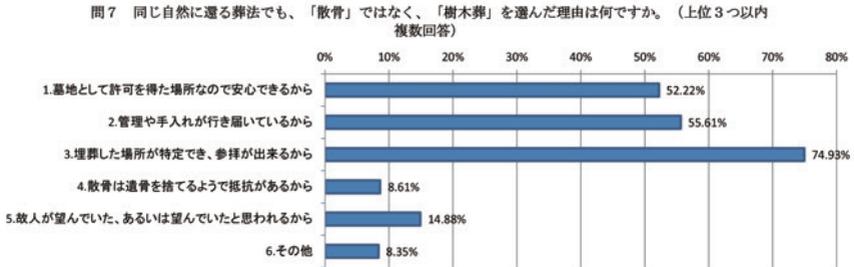


図5 散骨ではなく樹木葬を選んだ理由

特定でき、参拝ができるから」が最も多く287人、74.93%である。上位3つ以内なので、「管理や手入れが行き届いているから」213人（55.61%）、「墓地として許可を得た場所なので安心できるから」200人（52.22%）であり、後の2つは墓所の経営や管理に関するものである。（図5）

樹木葬は、樹木という可視化できるものがある、樹木はそれにより参拝の方向の依り代、シンボル、形になる。調査対象としたこの形式の樹木葬は、個別埋葬か所に樹木を植えたり、また個別埋葬か所全体の場所（区域）に樹木が植えられているわけでもない。面的な苔や小笹の地被植物に景石が置かれているだけである。樹木葬墓地のある周囲に寺院境内地の樹木や樹林地が見えるだけである。

しかし、利用者が「樹木葬」としてイメージし、「埋葬した場所が特定でき、参拝ができる」として選んでいるのは、寺院境内の一角にあり、樹木葬と呼ばれる位置、区域が「一つの空間」として見え、かつ個別埋葬したグリッドの位置をおよそ特定できるからであると考えられる。

個別ヒアリングでは「岡山から、妻が好きだった京都にした。子どもがいないから、生前から樹木葬がいいと考えていた。ここは個人墓であり共同墓である。気持ちが静粛になる。墓地は神戸にもらったが山の中で、それに転勤族なので。隣に住んでいる甥に後のことを頼んでいる」と。

③永代供養を望んでいるのに、子どもに祭祀を期待している

④個別墓ではないのに、子どもに祭祀を期待している

③と④は関連しているので、一緒に以下に分析する。

永代供養を期待しているのに、子どもが参拝してくれることを期待する。個別墓所ではないのに子どもの参拝を期待している、という矛盾が見られる。

そもそも、樹木葬墓地を選択した人は（問5複数回答）で、「承継者がいなくてもいいから」224人58.33%、「墓のことで周囲に負担をかけたくないから」228人59.38%で計452人いる。1位は「自然に還ることができるから」230人59.90%としても。（図6）

しかし「埋骨された後、樹木葬墓地を訪れて祭祀をする人がいるか」（問8）では、「決まった人がいる」195人50.91%、「決まってはいるが、期待する人がいる」63人16.45%、「期待はしないが墓を訪れて祭祀してくれる人がいれば、それで嬉しい」103人26.89%で、大半が樹木葬墓地を訪れてくれる人がいて、祭祀を期待している。「決まった人も希望する人もいない」「祭祀を希望しない」は、わずかそれぞれ11人2.87%にしか過ぎない。（図7）

では、「誰を想定しているか」（問8-1）を見ると、「息子」142人41.04%、「娘」177人51.16%、「子ども」21人6.07%で、圧倒的に子どもに墓所での祭祀を期待している。

「配偶者」は12人3.47%で意外と少ない。配偶者は年齢も近く、高齢になる

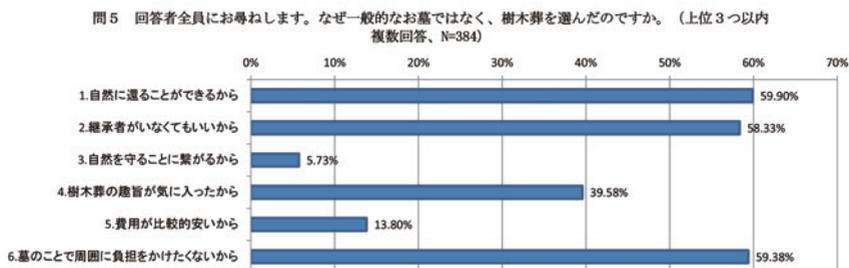


図6 樹木葬を選んだ理由

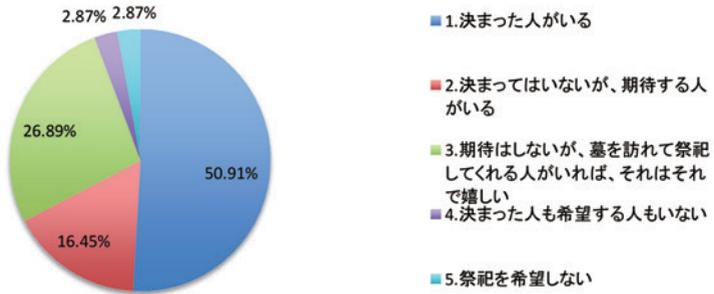


図7 埋骨した後、樹木葬墓地を訪れて祭祀をする人がいるか

ほど参拝も難しくなると考えているからだと考えられる。「兄弟姉妹」31人、「孫、ひ孫」36人で、近い家族に参拝を期待していることが分かる。

このように、樹木葬を選択した動機と子どもへの祭祀の期待の矛盾が見られる。

また、樹木葬を申し込んだ時に墓があった人になぜ樹木葬を選んだのか（問4-1）でも矛盾が見られる。

「お墓が遠い所にあるから」72人40.22%、「継承者がいない、あるいはいなくなる可能性があるから」71人39.66%と、「子どもに墓の継承のことで負担をかけたくない」104人58.10%と、墓の継承の問題がほとんどである。（図8）

しかし「すでに墓があったが、その墓に入らない理由」の中で、最も多いのは「子どもに墓の継承のことで負担をかけたくないから」である。墓の継承は子どもに負担だが、樹木葬墓地には子どもに参拝してほしいと考えており、墓の継承と子どもに祭祀を期待することが、別のことと考えられている。また、子どもに祭祀を期待する一方、「継承者がいない、いなくなる可能性があるから」と4割が考えている。樹木葬の利用者は、墓の継承者、子どもの墓の祭祀が期待しなくなっても、つまり家族の祭祀がなくなっても、自分の死後、祭祀を望

問4-1 上記で、1～3「墓があった」と回答した人にお尋ねします。家の墓があるのに、その墓に入らないのはなぜですか。(上位3つ以内複数回答、N=179)

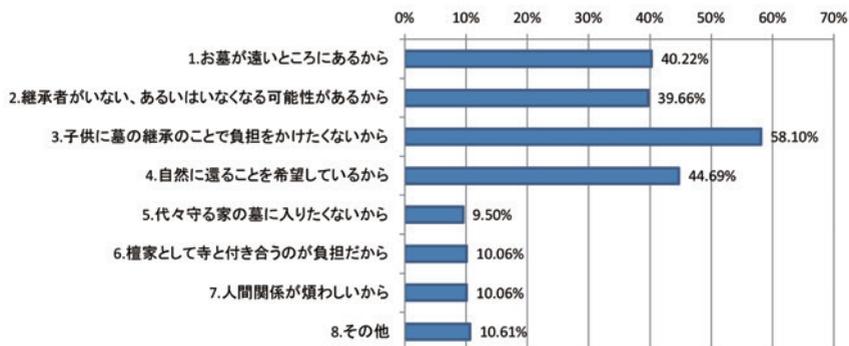


図8 家の墓があるのにその墓に入らない理由

んでいると考えられる。

では、家族の祭祀が無くなっても、自分の死後に祭祀を望んでいることを示している一つは、「現在日本にはおよそ150か所以上の樹木葬墓地があり、形態も様々ですが、なぜそこを選んだのか」(問6、5つ以内複数回答)に見られる。(図9)

最も多いのが「お寺が管理してくれるので安心だから」60.36%と「永代供養をしてもらえるから」が58.55%とび抜けて多い。供養では「合同供養祭を行ってくれるから」が19.69%あるが、会員による供養は限界がある。寺院の持続性による供養の永続性を期待している。しかし永代供養は寺院の持続性が前提である。

調査地の4カ所の寺院は京都という大都市にあり、また有名寺院の塔頭としてその持続性が期待されていると考えられる。

岩手県一関市にある知勝院の樹木葬墓地は、樹木を墓標としていて、樹林の管理が重要だとしている。

「樹木との関わりは長期にわたることを覚悟することが必要とのゆるぎない方針が決まった。このことにより300年以上続く寺が保障する体制をいかに理

問6 現在、日本にはおよそ150か所以上の樹木葬墓地があり、その形態も様々ですが、あなたはなぜ、数ある樹木葬墓地の中から(寺院と墓地の名前)を選んだのですか。(上位5つ以内複数回答、n=386)

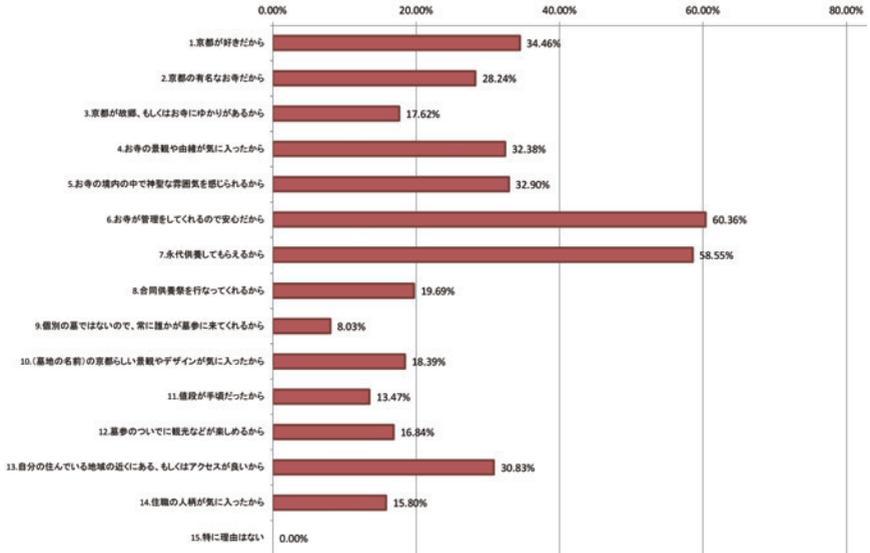


図9 多数の樹木葬墓地からなぜここを選んだのか

解していただくかの実践の勝負となった」(祥雲寺・千坂住職当時)と述べている。

家族構造の変化により、家族が限りなく一代に近づく現在、樹木という時間性と組織(寺院)の時間性が「樹木葬」墓地を保障している。

しかし今回調査対象とした「京都の樹木葬墓地」は埋葬地に樹木は無く、「樹木葬というイメージ」が強い。

⑤墓の継承と参拝への期待は異なる

樹木葬墓地を選んでいる人には理由が二つある。自然志向派と継承問題解決策派である。

問5(3つ以内複数回答)を見ると、「自然に還ることができるから」230人、「自然を守ることができるから」22人、「樹木葬の趣旨が気に入ったから」152

人で自然志向派は計404人。継承問題解決派は、先に述べたように計452人ある。

2つの理由はほぼ同数であるが、自然志向派より継承問題解決派の方が多い。樹木葬墓地の“趣旨”は何を示しているのか明確でなく、自然志向と継承問題解決の両方を意味しているかもしれない。とすると、樹木葬墓地は、自然志向より、継承問題の解決に力点があると考えられる。

そのため、樹木葬により、「継承者がいなくてもいいから」「墓のことで周囲に迷惑をかけたくないから」と墓の継承の問題が解決されても、参拝や供養が期待されている。

個別ヒアリングでは、「生まれも育ちも京都で、息子も孫もいる。兄から墓を継いでくれと言われていた。妻の実家は盛岡で墓があるが、荒れ放題で改葬した。安らぐのは私たち夫婦の骨の収まり所と両親のものと合同法要してもらえから。」そして「なぜ墓を継がないのか、それはそれなりの責任が生じるから。息子にそれを継がせるのは忍びない。…今は息子や娘に立ち会わせて、法要にも孫まで連れて参加している。横浜から今朝来た」と言う。

⑥樹木葬のイメージは可視化できること

しかし、樹木葬墓地は、無形化の墓地の中でも、可視化できることにある。(問5、問7)先に述べたように、樹木葬は埋葬した場所が特定でき、参拝できる。実際、4カ寺院樹木葬墓地に所々花が手向けられていた。散骨も海やどこかの場所がおよそ特定でき、参拝することも可能であろう。海外の散骨スペースや無名の墓地でもシンボルとしている彫刻の場所に花が置かれていたり、家族が訪れる姿をよく目にしたことがある。しかし樹木葬は故人の墓所の位置が特定できて、それに向かって直接墓前で参拝すること、祭祀することができる。

つまり、樹木葬は、石碑ではないが、“樹木”という墓標に代わるもの(知勝院や海外調査墓地)がある。今回の調査対象地は、樹木そのものはないが、「樹木葬墓所」という“場”というシンボル空間(見える可された参拝対象)に向かって、参拝することができる様式だと考えられる。

問17 家の宗教は別として、いま、あなたが信仰している宗教がありますか。神道、仏教、キリスト教、それ以外の宗教に分けるとどの宗教に入りたいですか。(n=389)

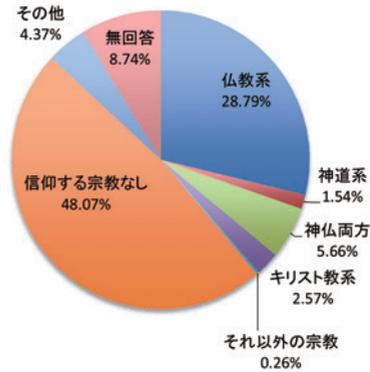


図10 信仰している宗教があるか

利用者や家族が参拝する、永代供養という祭祀を期待している、という点から、樹木葬墓地が寺院の境内にあるという点に意味があると考えられる。寺院に持続性があれば、寺院という場所自体が祭祀を行う宗教性を持っているのだから。ただし、祭祀を行う人間が寺院にいることが前提であろう。

個別ヒアリングでは「自然の好きな子どもだったので、樹木葬を探していた。子どもの遺骨を20年間家に置いていた。月に1、2回はここにお参りに来ている。1本の樹を植えたい、でも近い所にはない。この樹木葬墓地の周囲には高く大きな樹々があるので良かった」と語っている。

⑦矛盾すること「信仰している宗教」はないが、宗教的行為は行っている

「あなたが信仰している宗教はあるか」(問17)では、「信仰する宗教なし」48.07%なのに、なぜ「寺院の樹木葬」なのだろうか。「仏教系」は28.79%あるが、その他神道系1.54%、神仏両方5.66%、キリスト教系2.57%、それ以外の宗教0.26%がある。(図10)

仏教系寺院境内の一角に樹木葬墓地の区域があり、合同供養祭は仏教寺院の

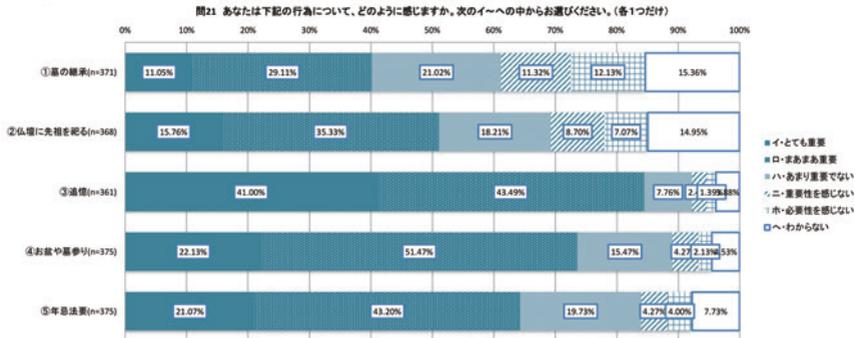


図11 仏壇、墓参り、お盆の行事、年忌法要等への感じ方

住職による読経により行われる。信仰している宗教は無く、また仏教系以外の利用者もあるが、樹木葬墓地が仏教系寺院境内にあることに、利用者はほとんど関知していない。

墓や死者への祭祀に関連した行為についての重要度（問21）については、「墓の継承は重要（まあまあ重要）」40.16%、しかし「お盆や墓参りは重要（まあまあ重要）」は73.6%となっている。信仰している宗教は無く、また自分の信仰や宗教ではないが、樹木葬墓地での宗教的行為は仏教であり、寺院における樹木葬墓地の位置は矛盾している。「信仰する宗教はなし」が約半数だから、場所は関知しないのであろうか。寺院境内地以外の墓地も全国に多くあるが、今回調査対象としたのは、寺院境内にある。

墓を継承するという行為に比較して、お盆や墓参りは2倍弱重要と感じている。墓はないが、墓参りが重要であるとするのは、どこの墓に参ることなのだろうか。墓、石碑という物・土地は継承しないが、参るという行為は重要だと考えている。だとすれば、“継承しないお墓”として樹木葬墓地を見ていると考えられる。（図11）

考察のまとめ

・追憶する場、供養・祭祀される場→樹木葬墓地という“場”が欲しい＝必要
つまるところ、はっきりとした信仰や宗教、それに裏打ちされた場、この場合仏教寺院にある樹木葬墓地に対して、故人に対して追慕する場が欲しい、また自分自身の死後、誰かによって、この場合寺院の住職や樹木葬墓地に集まる会員による合同供養祭、また寺院住職による永代供養に期待している。利用者は寺院境内地にある樹木葬墓地という“場”が欲しい、“場”を必要としている、と考えられる。

まとめ

以上、調査対象とした4カ所寺院の樹木葬について、利用者の特徴的だと考えられる項目を述べてきた。このような特徴から樹木葬墓地がもっていると考える特性として次の点をあげたい。

(1)樹木葬墓地の特性

- ・全くの無形化にふみきれない、“無縁になる途上のもの（場）”として期待
いくつか判明した人々の意識の矛盾から、いずれ無縁になるであろうことを考えつつ、現在はその途上として、樹木葬墓地という“場”に自分自身も、家族がいる場合は子どもや配偶者など、また会員や関係者が存在することを期待している。
- ・「樹木葬」への曖昧なイメージとポジティブな捉え方
「樹木葬」という言葉は、多様な様式の墓地に使われていて、確たる定義がない。しかし、墓の継承への不安と同じくらい、「自然へ還る」という期待や憧れをもってしまうあいまいなイメージが人々を魅了している。不安を解消してくれる、自然に還っていく、というポジティブな捉え方が、「樹木葬」墓地を支えている。
- ・お墓に代わり可視化できるもの + 合祀ではなく個性をもつ
人々は子どもなどに参拝、祭祀を期待していて、お墓に代わり可視化で

きる、その依り代として「樹木葬」墓地が必要になっている。また狭い空間であるが、合祀ではなく埋葬者の個性をもっていることが重要になっている。

- ・都市部に樹木葬として省スペースで自然のイメージを支える

利用者の住居地は地域別は判明しているが、都市規模別は分からない。大都市京都市内に造られた樹木葬墓地は省スペースで樹木がないが樹木葬のイメージを与えている。それは、景石としての自然石、面的な苔や小笹、背景としての樹林という作りが、日本庭園の造形に支えられた“自然”のイメージに支えられていると考える。

- ・宗教的あいまいさ、距離感のほどよさ

利用者は檀家ではないが、住職や会員同士の合同法要、供養が拠りどころとなる宗教的なあいまいさや、距離のほどよさが樹木葬墓地を支えている。

(2) 「樹木葬」のお墓での“位置”

4カ所寺院の樹木葬は、特異な形態をしており、『お墓と家族』p228-229に書いた図表の墓地の持つ遺骨の埋葬空間形態を海外事例を含めて今後詳細に検討していきたい。本稿では、その一部として、樹木や樹林と、遺骨の埋葬場所から、対象地の位置づけを見る。

「樹木葬墓地」と呼ばれる墓地の形態や立地、システム、社会的背景、宗教、思想は多様であることは先に述べた。これまで日本や海外で現地調査した中でも樹木葬墓地に関わる様式も様々である。

イギリスは自然埋葬地として、樹木を墓標にして樹林地の形成を図るもの、都市に近い森林を墓地にして樹林地の保全を図るもの、森林の中に埋葬する方法、樹林地の保存、スウェーデンでは墓地の中の森林地の下に埋葬するもの、ドイツでは大木を共通の墓標として森林そのものを樹木葬墓地として森林管理と一体になっているもの等々（図12）、その社会的背景や開設された理由・目的、

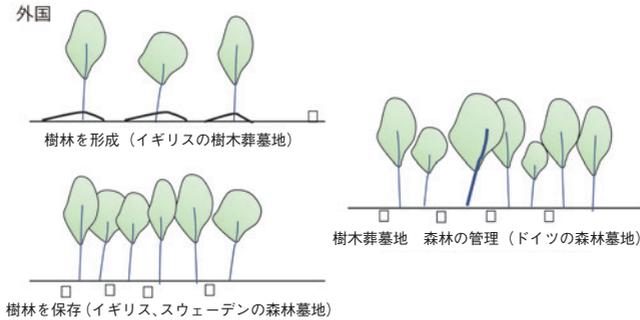


図12 外国の事例（樹木と埋葬場所の位置）

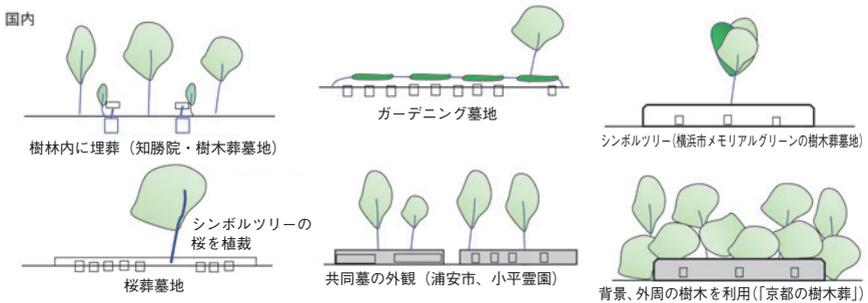


図13 日本の事例（樹木と遺骨の埋葬場所の位置）

立地や様式、宗教との関係、経営管理者も多様である。

そこで、イギリスの自然埋葬地の樹林墓地や、国内で樹木葬墓地として開設された樹木と墓所の空間的あり方を簡単に模式図にしてみると次のようである。日本の事例として「樹木葬」という言葉を初めて使った一関市の知勝院、NPO 法人エンディングセンターの桜葬、横浜市メモリアルグリーンの樹木墓地、東京都小平霊園や浦安市の樹木墓地・樹林墓地、NPO 法人スノードロップのガーデニング風樹木葬墓地、今回調査地の京都の樹木葬などをあげた。(図13)

イギリスやドイツなどは樹林地の形成や保全や管理に力点が見られる。一方日本では、知勝院以外は土地の効率的利用、省スペースに力点が見られる。

(3) 「都市型共同墓所」としての発展型

都市型共同墓所を成立させる要素は、個人単位、共同祭祀、死後の平等性であると述べた。〔近代日本墓地の成立と現代的展開〕バラバラな、多様な個人（故人）が同じ墓所で眠る形をそう呼んだ。樹木葬墓地が樹木をシンボルとした合葬墓・共同墓と捉えれば、個人単位、死後の平等性は該当するだろうが、そこに共同祭祀が無ければ、共同墓を成立させる“共同性”とは何だろうか。ただ、同じ場所に眠る、遺骨を埋葬する、という合葬墓は、もし共同祭祀が無いのであれば、遺骨の捨て場になる可能性もあるだろう。

今回調査した、京都市内4カ所の寺院境内の特異な形態の「京都の樹木葬」は、利用者は死後の祭祀を期待しており、また寺院住職と毎年会員による共同祭祀が行われていて、私が呼んでいるところの「都市型共同墓所」であり、「都市型共同墓所」の発展型といえる。

しかし、その中でも「樹木」と「自然」という言葉、イメージは「都市型共同墓所」に共通にみられるものではない。また、樹木という言葉やイメージを通して、利用者は自然をイメージしている、見ているのではないかと考えられる。今後も多くの樹木葬に関わる国内外の事例から考えを深めていきたい。

謝辞

今回の樹木葬調査に当たって、「京都の樹木葬」をプロデュースする(有)カン総合計画の全面的な協力により、利用者アンケート調査やヒアリング調査を行った。筑波大学大学院の内田安紀氏を研究代表者とする国立歴史民俗博物館の山田慎也准教授と筆者の共同研究で、内田氏はアンケート調査結果の全体的分析、山田氏は葬儀の変遷から、筆者は現代墓制における樹木葬の位置づけの観点から分析した。(有)カン総合計画代表者である山崎譲二氏をはじめ、荘厳院、即宗院、正受院、両足院の各塔頭寺院のご住職、また快くヒアリングに応じてくれた会員の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- ・ 槇村久子：「近代日本墓地の成立と現代的展開」1993年 3月
- ・ 槇村久子：『お墓と家族』朱鷺書房、1996年 6月
- ・ 武田史朗：『イギリス自然葬地とランドスケープ』昭和堂、2008年 7月
- ・ 槇村久子：「世界の宗教に見る葬儀とお墓」『お墓の社会学』晃洋書房、2013年 9月、p161-p196
- ・ 槇村久子：「樹木葬墓地の多様化とその意味と背景、そして共同墓の進展」『研究紀要』第30号、京都女子大学宗教・文化研究所、2017年 3月
- ・ 槇村久子：「個人化・無縁化する社会の公共墓地の変化と対応」『研究紀要』第31号、京都女子大学宗教・文化研究所、2018年 3月
- ・ 槇村久子：「単身社会・無縁社会の進行と葬送・墓制の三つの方向」『現代日本の葬送と墓制』p88-p114、吉川弘文館、2018年 7月
- ・ 上田裕文：『こんな樹木葬で眠りたい』旬報社、2018年 8月

<キーワード>

樹木葬 葬送墓制 合葬墓 無縁社会 墓地

